

【主題】 これからの時代をよりよく生きる力を育む家庭科教育の実践

【副題】 「食品表示を見て選ぼう」の授業づくりを通して

【学校・団体名】 宮城教育大学附属小学校

【役職名・氏名】 教諭 安倍 彰人

1 はじめに

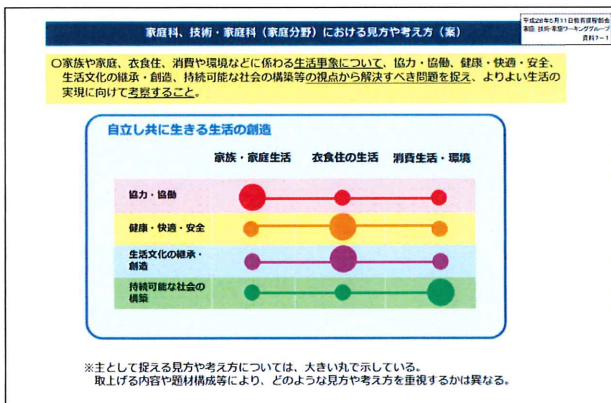
地球規模の課題に対し、各国が共同して取り組むべき重要な視点として国際的に提起された「持続可能な開発 (sustainable development)」と、それを包括的に進める目標を示した「SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標)」に関する取組が進められ数年が経った。その中で、現在と未来の生活に責任を持って行動する思考力、判断力、表現力を持つ市民 (消費者市民) を育てることが教育現場において大きな課題となっている [SDGs と家庭科カリキュラム・デザイン (2020) p. 8-10]。

そこで私は、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力の育成を目指す小学校家庭科での学びこそ重要であると考え、文献を基に家庭科とSDGsの関係性についての理解を深め、その知見を生かしながら授業実践に取り組もうと考え、本研究主題を設定した。

2 育成を目指す資質・能力の特徴とSDGsの関係

(1) 家庭科の学習内容と見方・考え方

家庭科の「見方・考え方」として協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築の4つの視点が下図のように示された [文部科学省 教育課題部会 家庭科、技術・家庭科ワーキング 第8回 資料7-1 (2016)]。



各学習内容と4つの視点はどれも関連があるが、関わり合いは異なっている。また「持続可能な社会の構築」においては消費生活・環境の学習との関わりが非常に深い。

(2) 家庭科の可能性

荒井 (2020) は家庭科で教える内容と特に関わりの深いSDGsについて下図のように整理した。



その上で「家庭科の学習内容の中にSDGs と関わる内容が多く含まれており、そこで培いたい理解や認識もSDGsの方向と重なっている。と同時に、家庭科は生活をよりよくする主体を育てることを目標としており、すべての行為は、図の中央に位置する生徒自身、すなわち生活主体のパワーアップにつながっている (p15)」と述べている。

このことから、家庭科はSDGsの理念を理解しながら、生活をよりよくしようと工夫する力を身に付けさせることのできる教科であると考えられる。

3 「食品表示を見て選ぼう」の授業の実際

(1) 題材について

本題材は、「できることを増やしてクッキング」で学習した、いためる調理の特徴の理解を生かし、家庭での実践につなげていけるように構成したものである。子供は三食野菜炒めの調理を通して、家庭でも実践したいという思いを強く持っている。より一層、家族の一員としての成長を実感させるために、調理だけでなく、消費者としてよりよい買い物の仕方を考えることを大きな目的にした題材である。5年生「生活を支えるお金と物」では、食品を選択する際、価格や量、賞味期限や消費期限などの情報の読み取り方を学習してきている。そこで、食品表示に書かれている様々な情報を調べ、どの食品を選択するか考えることを通して、

健康や安全、持続可能な社会の構築などの視点で食品を選択することの重要性を理解し、その後の家庭での実践につなげていけるようにしていく。

(2) 題材の本質について

本題材の本質を次のように考えた。

- ①食品表示の見方を理解することで、目的に合ったよりよい買い物の仕方を考えることができること。
- ②食品表示の見方の理解が自分や家族の食生活を支えたり、より豊かにしたりしていることに気付き、学習を生かして家庭で実践しようとする意欲を高められること。

(3) 授業のねらいと概要について

①ねらい

食品表示に書かれている情報の収集を通して、目的に合った食品の選び方について考え、工夫することができるようにする。

②指導過程の概要

- 1 本時の学習課題を確かめる。 【手立て1】-①
- 2 食品表示について調べる。
- 3 調べた結果を共有する。 【手立て1】-②
- 4 どの食品を選択するかを考える。

※なお、第2時では、家庭実践の報告会を行い、自分の成長を振り返らせた。 【手立て2】

(4) 主な手立てと授業の実際

【手立て1】

子供の「知っているつもり」「分かったつもり」を揺さぶる働き掛け

①「分かったつもり」を揺さぶる資料提示と発問

授業の導入で外袋から取り出した3種類のベーコンを提示した。そして、子供がこれまであまり目を向けてこなかった表示にまで目を向け



【教材に出会う場面】

させ、新しい「ものの選び方」を獲得させるために、次のようなやり取りを行った。以下、その授業記録である。

- T 1 : みんなだったらどのベーコンを選びますか。
- C 全 : 挙手 (A)0人、(B)14人、(C)16人
- C 1 : Bを選ぶ。Aに比べてBは色がいいから。
- C 2 : Bを選ぶ。Cに比べて脂が少ないから。
- C 3 : Cを選ぶ。脂の部分が美味しそう。
- C 4 : Cを選ぶ。野菜と炒めたときに美味しそう。
- C 5 : Cを選ぶ。Bは着色料とか変なものが入っていたら嫌だから。

- T 2 : どこを見れば分かりますか。
- C 6 : パッケージ。裏側。
- T 3 : 食品表示のことだね。みんなは自分や家族が食品を選ぶとき、何をみて選んでいるかな。
- C 7 : 賞味期限や消費期限。
- C 8 : 値段で選ぶ。
- C 9 : 産地で選ぶ。国産のものを選ぶ。
- C 10 : 量や品質で選ぶ。
- C 11 : アレルギーがあるので、何で加工されているかで選ぶ。
- T 4 : 本当にそれだけで選んでいいのか。他に大切なことはないのか。
- C 全 :。

初めに、パッケージから出したベーコンを提示したことによって、見た目だけでは判断することが難しいことに気付き、ものを選ぶ際にはパッケージを見る必要があることを感じ取らせることができた。

その後、T 4の発問によって沈黙の時間が流れた。この沈黙は、発問によって子供の思考が揺さぶられ「他に何かあるか」と更に考えようとしている姿と捉



【沈黙する場面】

えることができる。一方で「C 7からC 11まで多くの視点が出たのにも関わらず何を聞いているのか」と動揺し、思考が止まってしまった姿として捉えることもできる。

②「知っているつもり」を揺さぶる発問

子供は実際にパッケージを見ながらクロームブックを活用して調査活動を行った。その後、調査したことを基にグループ共有と全体共有を行った。以下その授業記録である。

- T 5 : Aはどんな特徴がありましたか。
- C 12 : Aは発色剤を使っていないから素材を生かしている。
- C 13 : 発色剤は肉の酸化を抑えることができるみたいだよ。
- C 14 : Aはアレルギーが発生するのが少ない。
- T 6 : 発色剤のようなものを含めて何というか知っていますか。
- C 15 : 食品添加物。
- T 7 : Bにはどんな特徴がありましたか。
- C 16 : 卵たんぱくや大豆たんぱくは、食物アレルギーの原因になるようだ。
- C 17 : コチニール色素というのが、アナフィラキシーショックを起こすことがある。
- C 18 : 減塩だから、血圧が高い人にもおすすめ。

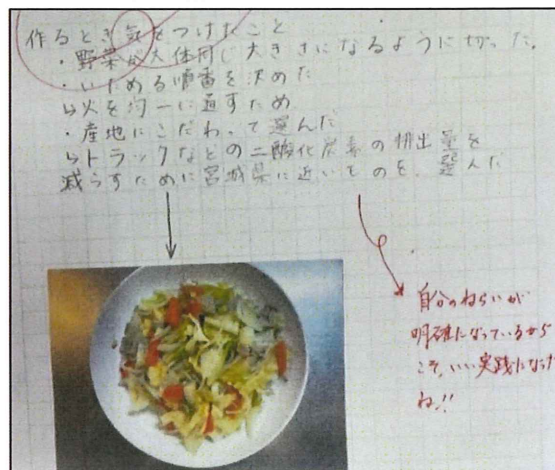
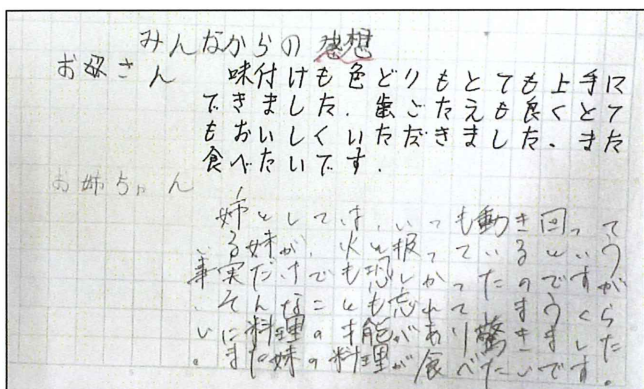
- C19: GABAが血圧を下げる効果があるみたい。
- C20: 賞味期限が長い。
- T8: Cにはどんな特徴がありましたか?
- C21: 発色剤を使っている。
- C22: 酸化防止剤も使っているよ。
- T9: メリットやデメリットでまとめていた人もいたけれどどう。
- C23: Aは発色剤をそこまで使っていないので、コストを下げられる。でも色が薄くなってしまふ。それに、ポツリヌス菌というものも発生してしまふかもしれない。
- C24: Cはカロリーが高い。
- C25: Bには亜硝酸ナトリウムという成分が入っていて、発がんの可能性がある。
- C26: でも、亜硝酸ナトリウムは野菜にも入っているよ。
- T10: 国が安全だよと認めた量だけ入っているんだね。それぞれにメリットやデメリットがあるなら、どの食品を選んでもいいよね。
- C全:。

子供はインターネットを活用してパッケージに書かれている自分の知らない事柄について調査を進めた。そこで得た知識を共有した後に、T10の発問を行ったが【手立て1】①のときと同じように沈黙の時間が流れた。これは、授業冒頭に見通しを持たせるために伝えた家庭実践を行うということが自分事となっておらず、得た知識の発表会のような形で授業が展開していったために現れた姿と捉えることができる。



【手立て2】

学習による変容や家庭での実践結果に対する価値付け



これは、学習内容を生かして家庭実践を行った子供のノート記録である。第2時の実践報告会の様子からも、子供一人一人が自分の家庭生活を見つめ、自分の生活や目的に合った取組を行ったことが分かった。教師側だけでなく保護者からも実践による子供の成長を認め、今後の生活に向けた見通しを持たせたことで、更に家庭の一員としての成長を実感させることができたと考える。また、授業後も、日々の生活の中で「持続可能な社会の構築」の視点を意識して生活するようになったと話す子供が増えた。

4 授業の考察を通して得られた成果と課題

(1) 子供の中で「ずれ」を生ませることの重要性

子供の「分かったつもり」を揺さぶるための資料提示は、これまで自分が知っていたことや考えていたこと、経験してきたこととの「ずれ」を生み、家庭科の学習過程における生活の課題発見につながっていくことが見えてきた。この「ずれ」がなければ子供は「自分事」として課題を捉えることができず、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度は身に付かないだろう。本実践のように「他にどのような食品表示の見方があるのか」と問いを持たせることができれば、子供は主体的に課題解決に向かっていくと考える。

一方で、教師の発問は時に子供の思考を遮ってしまうことも見えてきた。本実践では【手立て1】①の授業記録のように教師側から意図的な発問を行った。しかし「実際にパッケージを見ながら選んでみよう」とすぐに実践的・体験的な活動に進む授業展開も考えられた。そうすることで「選択する」というゴールに向かって子供の思考が進み【手立て1】②の授業記録のような子供の新しい「ものの選び方」

の視点が自然に出てきたのではないかと考える。教材そのものに価値があるからこそ、教師側があえて問うのではなく、子供の学びの文脈に沿った授業展開について研究を深めていきたい。

【手立て1】②で述べたように、本実践では得た知識の発表会のような形で授業が展開されてしまった。本来目指していた姿に近付けるためには題材構成の工夫が必要であったと考える。日本家庭科教育学会

(2019)は「家庭科が、既存の課題に対応する1つの解を教えるのではなく、子どもたち自らが学習課題を設定し、学びを通して根本的な発見をし、ものの見方が変わり、そして、そこからたくさんのお答えを自ら導き出せるように促す教科であるのは、基礎となる知識・技能がしっかりと習得されているからである (p. 136-137 原文)」と述べている。このことから、次のような題材構成の工夫があったと考えた。

第1時 調査(実践的・体験的な活動)を通して知識を習得する。

第2時 自分なりの答えを導き出し、友達と考えを共有する。

第3時 家庭実践報告会を行う。

生活の捉え方、生活を営む上で必要な知識・技能が身に付き、それをどのように使うかを考えられるような題材構成の在り方を今後も検討していきたい。

(2) 実践し続ける子供を育む価値付け

【手立て2】で述べたように、教師はもちろんのこと、保護者からも実践による子供の成長を認めることは、家庭生活をよりよくしていこうと工夫する実践的な態度の育成につながると考える。一方で、この価値付けが教師だけではそうはならないことが考えられる。家庭科において育成を目指す資質・能力「学びに向かう力、人間性等」では、目標に次のように示している [文部科学省 (2018) p15]。

(3) 家庭生活を大切にすることを育み、家族や地域の人々との関わりを考え、家族の一員として、生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養う。

ここに示されている「家族の一員として」という視点が重要になると考える。教師のみならず、家族(保護者)からの価値付けがあるからこそ、子供は今後も家庭生活をよりよくしていこうと実践し続けるのではないだろうか。そのためにも、学校で学んだことを家庭で実践し、それに対する価値付けを行

うことは重要であると考えます。

一方で、子供の振り返りに対する価値付けの仕方については今後も検討していく必要があると考える。本実践での子供の振り返りには、家庭科の見方・考え方である協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の4つの視点で振り返られているものが多かった。これまで学習してきたことが実践につながっているという点では素晴らしいと感じる。しかし、その振り返りに対して教師はその意図を踏まえた価値付けを行えるものの、保護者はそうはいかないのが実際のところである。

【手立て2】で示したノート記録にもあるように、教師の意図とは裏腹に家族は素直な感想を述べる。この感想は決して悪いものではない。むしろ「家族の一員として」という意識を持たせることにつながる。しかし、SDGsの理念を理解しながら家庭生活をよりよくするためには、家庭での家庭科の見方・考え方の4つの視点で価値付けすることは極めて重要であると考えます。子供が学んできたことを基に家庭実践を行うからこそ、家庭を巻き込んだ取組みにつながる。子供のよりよい学びのために、どのように家庭と連携を図っていくか、今後も実践的に研究を深めていきたい。

5 おわりに

SDGsの取組は待たなしの状況にきている。子供たちは日々、学校や家庭など様々な場所で生活している。だからこそ、学校内での学習に留まらず、家庭実践を行うことが重要であると改めて感じた。生活をよりよくする主体を育てることを目標としている家庭科教育の在り方について、さらに研究を深めていかなければならないと強く感じる。

【引用・参考文献】

- (1) 荒井紀子 (2020) 『SDGsと家庭科カリキュラム・デザイン — 探究的で深い学びを暮らしの場からつくる』教育図書株式会社
- (2) 文部科学省 (2016) 『教育課程部会 家庭科、技術・家庭科ワーキング 第8回』
- (3) 日本家庭科教育学会 (2019) 『未来の生活を作る — 家庭科で育む生活リテラシー』
- (4) 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 家庭編』東洋館出版社